

【聞き取り票】

ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう

2013年12月

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）  
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、不安と苦しみを抱えながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じての命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”“ふたたび被爆者をつくるな”の声を広げてきました。

平和を求める世界の人々と手をつなぎ、地球上から核兵器をなくすためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに共有する人びとの輪をさらに広げていかなければなりません。

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者とヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐことを呼びかけます。被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいきましょう。

そして取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していきましょう。

[証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)]

記入年月日	2014年 7月 31日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	おくだ とよじ 奥田 豊治	性別	1. 男 2. 女
生年月日	明・大 昭 5年 月 日 (被爆時年齢 15歳)		
現住所	〒 電話 FAX		
被爆地	1. 広島 2. 長崎 [町名 基町 距離 km]		
手帳区分	1. 直爆 2. 入市 3. 救護 4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] 6. 被爆者の子・孫 7. その他		
氏名の公表の可否	1. 可 2. 不可		

## 1. 被爆したときのことをお聞かせください。

被爆時、年齢が幼くて当時の記憶がない方(被爆二・三世の方)は自分が被爆者(被爆二・三世)であることを、いつ、どのようにして知りましたか。

東友会の23区東部ブロックの代表をしている。直接の被爆ではない。昭和5年、山口県下関市で生まれ育った。生まれてから終戦まで15年戦争、ずっと戦争だった。戦時教育を受け、軍国少年だった。小2で日支事変、提灯行列をやった。小6で太平洋戦争が始まった。

中学でまともに学校に通ったのは1年間だけで、中2からは一週間学校に行くと、翌週は農村に行くという生活だった。中3は工場動員、神戸製鋼の長府工場でジュラルミンのインゴットを作った。13,000人ぐらいが働いていたが熟練工は少なく、ほとんど学生・生徒だった。原料のボーキサイトが入ってこないで、供出物や満州のアルミ貨幣も溶かしていた。海軍兵学校に行きたかったが、近視のため陸軍士官学校を目指すことにした。

一次試験に合格したら、憲兵が身内の思想調査に来た。8月6日の夕方、その憲兵が自宅に来て「新型爆弾が広島に落とされた。すぐ広島に行け」と命令された。そこで広島に行く準備をしたが、列車が動かなかったため8日まで出発できなかった。8月8日に列車が動き始めたので、特別に切符をもらって列車に乗ったが、動いては止まる繰り返しでなかなか進まなかった。真夜中にやっとのことで広島の2つ手前の駅に着いたが、駅舎はささら(籐)のようにくしゃくしゃになっていて、原形を留めていなかった。横川駅は改札がかすかに残っているだけだった。山肌がみな焼けていたので、いったいどういう爆弾だろうと思った。

広島には7つの川があるが、広島駅手前の太田川の鉄橋から見た川面には黒焦げで腹がパンパンに膨らんだ沢山の馬が浮かんでいた。その中には人の死体もあった。近眼だったが、それらがびっしりと埋まっているのがわかった。天井が壊れ壁面だけ残っている広島駅に着いた。陸軍の中国司令部に行きたかったが、市電は動いておらず、人もいなかった。

その頃下関ではアメリカの戦闘機が飛んで来ない日はなく、2度の大空襲を受け、B29が投下した「モロトフのパンかご」から一度に38もの焼夷弾が降ってくるなど、火に取り囲まれた経験もあった。防火用水槽に髪の毛の燃えている女性の頭をつつこんで助けたこともあった。そのため空襲には慣れており、焼け跡や死人は沢山見てきたが、この時の広島はさらにひどく、町全体が「べしゃっ」と押しつぶされた感じであった。電車道に沿って歩き、爆心地へ近づくにつれて人が焼けたひどい臭いがしてきた。市電のモーターの銅線の一部が「鋳流れ」になって(融けて)飛び出しているのを見た。工場での経験から、ものすごい熱が加わったことがわかった。

司令部は広島城の中にあっただが、石垣だけしか残っていなかった。その場にいた、包帯を巻いた士官に尋ねると「今は何も判らないから帰れ!」と指示された。そのとき一遍に緊張が解け、裸の蛇口から流れ出ている水道の水を飲み落ち着いたとき、周りにあるぼろ切れのようなものが全部死体だということによやく気が付いた。死体が積まれて山のよ

うになっていたのだった。目の前に見えたのが原爆ドームだった。

また電車道を歩いて駅へ向かったが、人通りはほとんどなく歩いているのは火傷を負った人と救援の人ばかりだった。呉から来た人に「ピカッと光って、ドンッと衝撃が来た」と、原爆が爆発した瞬間のことを聞いた。日赤の人は「今日ぐらいから傷口に蛆がわいてくる」と言っていた。小学校4年生ぐらいの子どもが「おかあさん、おかあさん」と言いながら木切れにつかまって歩いていた。シャツが破れているのかと思ったのは、背中が剥がれてぶら下がっていたのだった。

夕方になって広島駅まで戻ったが、列車がない。すると、石炭車が止まっているのに気付いた。「筑豊に行くに違いない、下関に帰れる」と思い、よじ登って乗り込むとすぐに眠ってしまった。そして下関になんとか帰ることができたのだった。

## 2. その後の人生についてお聞かせください。

広島ではこの世の地獄を見た。広島の資料館に行き、ある絵の前に行く、いつも心臓が止まったようになる。だから行きたくなかった。思い出したくなかったのだ。学生時代は全学連で学園闘争も経験した。

長崎に3年間住んだときのこと、高校生が原爆の話をしていた。「おばあちゃんから話を聞いた。おばあちゃんはいずれいなくなってしまうから、私が話を聞いて伝えている」とのことだった。自分が恥ずかしくなった。

20代後半から狭心症となり、長崎にいたときに悪化した。放射能は怖いということ再認識した。戦後A B C Cが米国に持ち帰った被爆者の内臓が日本に返還されたが、そこからは未だに放射能が出ているようだ。放射能を受けたものが、放射能を出しているのである。東京に帰ってから少し良くなったが、しばらくすると心臓がバクバクすることがあって病院に行くと「甲状腺機能亢進症」と診断された。今は薬でバランスをとっているが、眼球の側面が腫れて、右と左の眼球が同時に動かず、ものが二重に見えるようになった。

人類と核分裂は共存できないと思う。原発もいらない。福島富岡町は郡山に町ごと避難しているが、若い人がいなかった。若い人はもっと遠くに避難していたのだ。ある人が故郷の方角を見て、「帰りたい」とつぶやいていた。「安全というなら、総理官邸をここに移せばよい」とも言っていた。

爆心から1.5kmで被爆した仲間の手記をここで読みたいと思う。

「仲良しのゆりえちゃんと遊んでいるときにピカッと光った。気がつくやうに崩れ落ちた地下室にいた。ゆりえちゃんと逃げようとしたが、ゆりえちゃんは鉄格子が邪魔して動けず、私は「助けて！」と叫ぶと母が助けに来てくれた。ゆりえちゃんを助けたくて鉄格子を押したり引いたりしたがビクともしない。そのうち隣の家が燃え始めた。「早く逃げて」とゆりえちゃんが言った。私はゆりえちゃんを残して逃げてしまったのだ。途中、目玉が飛び出た人、皮が垂れ下がっている人、川は死体で一杯だった。兄は直爆で死亡、父はガラス片が刺さったまま帰ってきた。親子3人、黒い雨で濡れた体を寄せ合って茫然としていた。」

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

東友会江戸川地区の副会長は母を捨てて逃げてきたという。江戸川で34回目の追悼式があったので、副会長に証言してほしいと言ったが、泣きながら「母を捨ててきたから話せない」と言われた。そしてまだ話せないようだ。

東京には1万2千人の被爆者がいたが現在では7,000人を切り、今は二世のほうが多くなった。東京は他に比べて援護が温かく、無料で健康診断が受けられる。原爆犠牲者の追悼碑があるのは江戸川区だけで、丸木夫妻に描いてもらい、皆で彫って作った。瓦や噴水を設け、被爆アオギリの二世も植えた。東京都の原爆慰霊碑は品川から葛飾区立青戸平和公園に移した。

話を聞いてくれるのはありがたい。原爆のことを伝えてほしい。

白血病で亡くなった佐々木貞子さんの記録をパワポ用のUSBにして学校に配っている。先生と生徒にナレーションを入れてもらっている。西葛西小学校では10人の小学生が「私は語り部になる」と感想文に書いてくれた。永井先生の娘が自分の子どもを長崎に連れていけるようになったという記録もUSBにして配布した。

江戸川区では有志で2年に1回朗読劇「夏の雲を忘れない」を公演している。有名な女優も出ている。今年も開催する。ほぼ満員となる予定だ。出演している女優の高田さんより手紙をもらい、「上演できるところを教えてほしい」とのこと。小学校でもやった。市民でも参加できる。東京でやっているところが少ない。機会があったらやってほしい。

江戸川区での会員は204人となった。子や孫に話してほしい。生協の方とはいろんなところで一緒にやっている。生協から生まれた生活者ネットワークとも連携している。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？

① 可 2. 不可

**【聞き取りをおこなった方の記入欄】**

聞き取り日時	2014年7月31日(木)18:00~20:00	場所	日本生協連コーププラザ
聞き取りをされたのは	1. 個人 ②. グループ [名称:名称:JCCU協同組合塾「ヒロシマ・ナガサキを聴き、語り、受け継ごう」Cグループの6名]		
聞き取り票記入者	柳下 剛	TEL/メール	
連絡先	〒150-8913 東京都渋谷区渋谷3-29-8 コーププラザ 10階		
住所等	日本生協連中央地連事務局気付		

**4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。**

(Nさん): 今回、数字の裏にある背景について話を聴くことができた。教育の中でどのように伝えていくかが課題だ。知ろうとしない学生も多い。

(奥田さん): いとこの一人がマニラで戦死。学徒出身だった。まったく他人事ではない。長崎も浦上に落としたから死者7万人だった、雲がなく当初の投下予定地だったらもっと被害は大きかったはずだ。8月15日に敗戦がなかったら、21日には京都に投下する予定だった。「京都には落とさない」というのは嘘だ。原爆は今後2度と繰り返したくない。自分の命は20歳までだと思っていた。広島をさまよう中で戦争は嫌だと思った。

(Oさん): これまで何度か広島に行き、来週も行く予定だ。今の広島を見ても原爆のことを想像できない。これから新人を連れて案内するのだが、想像力を働かせないと伝えきれない。

(奥田さん): 証言集や写真集はあるが、においは伝えようがない。火葬するとすごいにおいがする、その時に広島のおいの原因がわかった。自分には伝える義務がある。今ではパワポも使って話している。東京でも「平和のための戦争展」をやっている。下町の江戸川でも大空襲があったことも伝えていきたい。江戸川のさくらホールでは毎年3月10日に大空襲の追悼式をやっている。是非来て欲しい。

(一同): 今日はお忙しい中、貴重なお話をしていただき、どうもありがとうございました。

以上